

浅草寺伝法院庭園の特別公開と 和時計のルーツを探る

2017年4月20日(木)

行程



集 合 7時45分 新百合ヶ丘駅北口 区役所前路上
バスへの乗車は、トエンティ・ワン側です。

出 発 8時00分 (裏ページの座席表をご確認ください)

持ち物 しおり、飲み物等、持薬、天候により雨具、緊急時連絡
メモ、筆記用具、保険証など年齢の分かる証明書

担当者連絡先 080-5513-5154 小林 090-8515-8535 小倉

国立科学博物館

上野公園内、西洋美術館のすぐ裏になり、道路を隔てた寛永寺の前になります。館内は広く、日本館と地球館、それに特別展とがあり、とても全体は廻りきれませんので、今回は、地球館2階の「科学と技術の歩み」コーナーを中心に見学することとします。

このコーナーには、江戸時代の百科事典『和漢三才図会』、平賀源内のエレキテル、からくり人形の茶運び人形（いずれもレプリカ）などが展示されています。目的の田中久重作の「万年時鳴鐘」は、重要文化財に指定を受けた本物が展示されています。さらに、天球儀にゼロ式艦上戦闘機や惑星探査で大活躍した「はやぶさ」の実物大復元模型に、はやぶさが小惑星「いとかわ」で採取した微粒子も展示されています。外にも見所満載の博物館です。

地球館2階の見学後は、あまり時間はありませんが、どうぞご自由に館内をご覧ください。今回は廻らない予定の日本館の方には、忠犬ハチ公の剥製や、南極で越冬し、奇跡的に生還したタローとジローのうち、ジローの剥製などが展示されています。

万年時鳴鐘年表には、東芝の創業者の1人田中久重が1851年（嘉永4年）に製作、1931年（昭和6年）に、田中家から東京科学博物館（国立科学博物館の前身）に寄託され、戦後の昭和28年（1953年）に、田中家から東芝に譲渡されました。

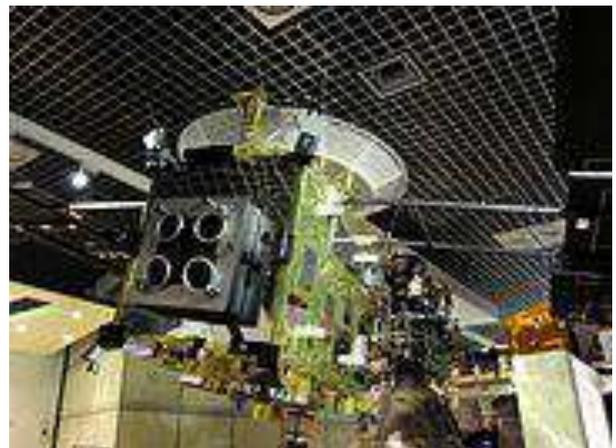
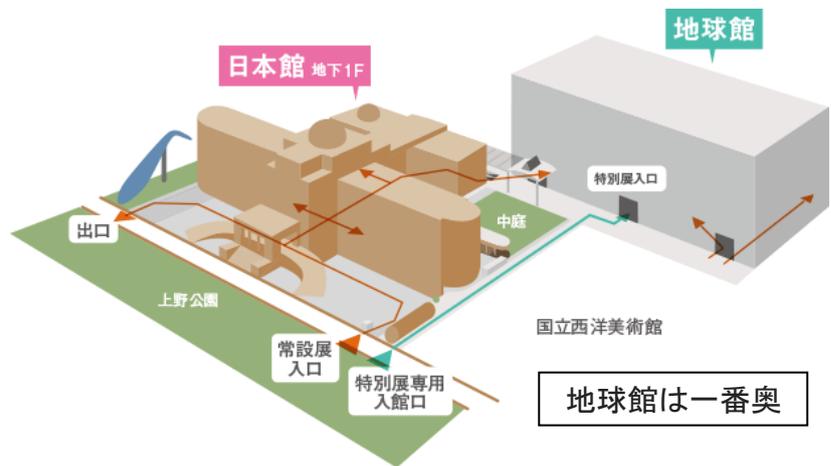
その後、2004年（平成16年）に、文部科学省の「万年時計復元・複製プロジェクト」によって、分解・復元されました。復元されたレプリカは、2005年に、「愛・地球博」に展示され、終了後東芝未来科学館に引き取られ、展示されています。



万年時鳴鐘

万年時鳴鐘は2006年に、重要文化財の指定を受け、所有者の東芝から、国立科学博物館に寄託され、現在も展示されています。

国立の博物館は、65歳以上の方は、入場無料となります。年齢を証明できる書類の提示が条件です。該当する方は、保険証、免許証等生年月日の分かる書類をお持ち下さい。



小惑星探査機はやぶさの実物大模型



弓曳童子(田中久重作)

浅草寺 伝法院庭園と大絵馬展特別拝観

金龍山浅草寺は、皆様ご存知の通り、江戸時代から庶民の寺として親しまれ、今日でも、日々大勢の参拝客を集めています。

浅草寺の起源は定かでないのですが、鎌倉幕府の公式記録である『吾妻鏡』に、聖観音を篤く信仰する源頼朝が、平家追討の戦陣を進め、下総の国から武蔵の国へ入った時に、浅草寺の聖観音に戦勝を祈願したことが記されています。やがて西国三十三観音札所に習って、関東にも三十三観音札所が整えられ、浅草寺は第十三番札所として、今日の東京都区内では、唯一の札所として整備されたと言われます。

下って、武家政治の創始者として頼朝を尊敬する徳川家康は、関ヶ原の合戦に際して、浅草寺の忠豪上人に依頼して、戦勝祈願をしています。

雷門から仲見世通りを通って、突きあたりの観音堂を左に折れると、伝法院と五重塔が現れます。

伝法院は僧職にある皆様の修行道場のため、非公開なのですが、今回特別拝観が認められています。

浅草寺の寺宝として著名なのが、200枚余が現存する大絵馬です。2代将軍秀忠や3代将軍の家光も絵馬を寄進したことが知られており、多くの大名や大身の旗本の寄進に始まり、元禄時代頃からは、大きく財を蓄えた豪商たちが、争って絵馬を奉納しており、その数200点を超えたというわけです。

この大絵馬は、伝法院本堂に掲げられていたのですが、戦災前の大修理の折に取り外されて蔵に移され、戦争中の人手不足から修理後も蔵にしまわれたままとなったことが幸いして、焼失を免れたのです。江戸期の著名画家(絵師)谷文晁、鈴木其一、長谷川雪旦、歌川国芳、逸見(狩野)一信らの作、60余点が今回展示されています。

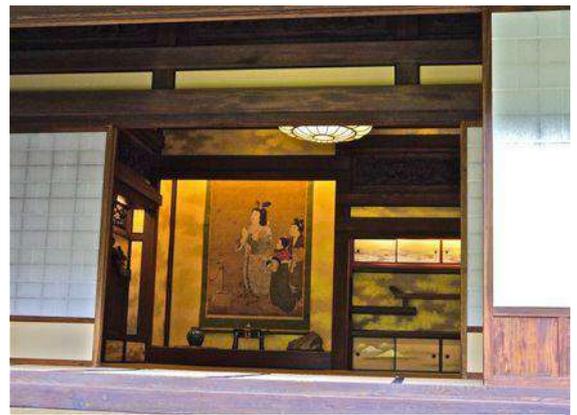
伝法院庭園は、奇跡的に戦災を免れたため、戦前からの姿をそのまま残しています。園内約1万平米の庭園は観音堂と仲見世の喧騒が嘘のような静寂な世界です。現在では、スカイツリーを借景として楽しむこともできます。平成23年(2011年)には、国の名勝の指定を受けました。



本堂



庭園から伝法院を臨む



伝法院 大書院



徳川家光寄進の蒔絵の神馬

昼食処 三定（雷門右隣）

雷門の右隣です。地図をご覧ください。



セイコーミュージアム

国産時計メーカーの草分け、セイコーHDが独力で設立、運営している時計博物館。

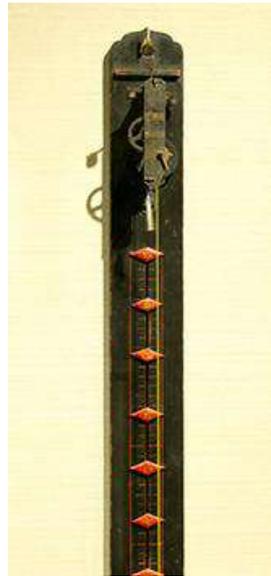
創業者の服部金太郎が、その晩年に収集した不定時法の時を刻む機械式の和時計や、中世後期の西洋時計の数々から、時代を追って、最新式の時計まで、時計の歴史を時計に語らせるスタイルでの展示は、大変迫力があります。

2グループに分かれて、説明員さんの説明をうけながら、小1時間の見学を楽しみましょう。東芝の創業者、田中久重が万年時鳴鐘の前身として作成した須弥山儀(シュミセンギ)も、外国に流出したものを、初代金太郎が買い戻し、展示されています。櫓時計、尺時計、枕時計の数々もまた、定時法を受け入れて後、不要になったとして海外に流出したものを、創業者が手を尽して買い戻したおかげで、良質なコレクションとして、我々が見ることが出来るのです。それだけではなく西洋時計の成長過程を物語る時計も見ることが出来る、貴重な博物館となっています。

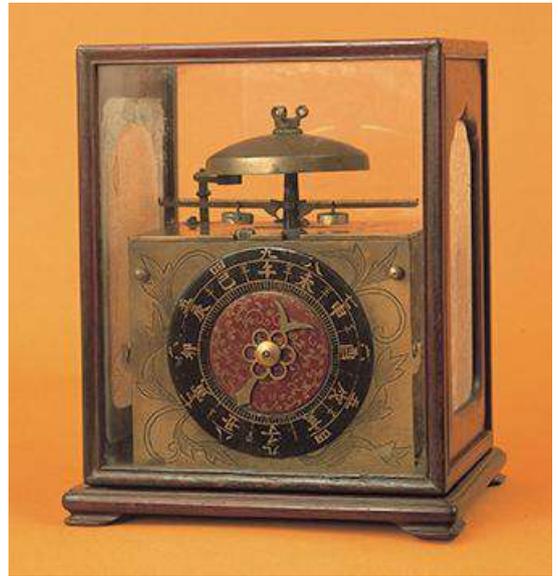
大正3年(1914年)に精工舎が発売を開始した、国産初の腕時計ローレルや当時の柱時計など様々な時計から、現在に至る時計の変遷を辿ってみることにしましょう。時計を小道具に使った浮世絵なども楽しむことが出来ます。



二挺天符目覚付袴腰櫓時計



初期一挺天符尺時計



一挺天符枕時計



西洋時計に群がる町人たち



美人と櫓時計初の国産腕時計



ローレル 1914年(大正3年)

東芝未来科学館

川崎駅前に立地しますが、開館が 10 時なので、帰路最後の見学地と致しました。

東芝の創業者は、万年時鳴鐘の製作者で、からくり儀右衛門と称された田中久重と、発明王として日本のエジソンと呼ばれた藤岡市助の2人です。

この科学館の本来の狙いは、電化製品が未来の世界にどう貢献するか、電化製品の将来を予測する点にあるのですが、ここではヒストリーゾーンを中心に見学します。

まずは、2004年に解体・復元プロジェクトで、解体修理が行われた万年時鳴鐘の構造と機能について、図入りで説明を伺い、さらに儀右衛門作のからくり人形の仕掛けなどを伺います。

万年時鳴鐘は、6面が夫々異なる機能を持ち、まず1面が和時計として不定時法の時を刻み、2面は24節記の月日を表わし、3面は七曜日を表示し、4面は十干十二支を示し、5面は月の満ち欠けと日付を表わし、最後の6面は定時法の洋式時計として時を刻むという、驚くべき多機能を備えた優れ物です。その上、さらに天頂面には当時としては最も正確とされた日本地図が描かれ、その地図上に太陽と月の動きが表示されるのです。高さ 60cm、重さ 38kg、幅約 65cm の身体にこれだけの機能を詰めて、真鍮製の二重ゼンマイ2組で、これだけの表示を実現していたのです。その辺の話を伺えると良いですね。

その後、白熱電球と電球の利用を可能にした二相交流発電機や昭和30年代に次々に市場に登場した電化製品の数々を見学しましょう。



万年時鳴鐘1面(和時計)



万年時鳴鐘6面(洋式時計)



万年時鳴鐘5面(月の満ち欠けと日付)



最初の電気冷蔵庫



最初の日本語ワープロ